



哀 歡 抄 (十九)

尾崎 文英 ぶんえい

鮎の目に青い山脈見えて過ぐ
明易し吾娘との旅のあらし山
沖よりも遠く見ており白日傘
みすゞの名墓石に拾う日雷
鬼百合の鬼遊び居る水際まで

汗拭う声無き経に生命込め
かなかなが啼けり郷愁不意打ちに
角巻きの駒子を見過ぐ月夜道
冬銀河知らざる数の魂澄みて
鶏の首刃ものを噛んで雪烈し
蒲公英の絨毯となり旭が昇る

(『創流』所属)

